

●セミタケ (*Ophiocordyceps sobolifera*)



セミタケはニイニイゼミの幼虫に寄生する冬虫夏草(子囊菌)の仲間、名古屋周辺では6月下旬～8月上旬に見られます。宿主であるニイニイゼミの幼虫は巣穴の上部で踏ん張る様な状態で絶命しており、通常、その頭部から棍棒状の子実体が発生します。

●セミタケ (*Ophiocordyceps sobolifera*)

棍棒状の子実体の結実部(先端)には子嚢殻が埋生し、その孔口は結実部上に点状に分布します。子嚢殻の内部には有性胞子である「子嚢胞子」が詰まった子嚢が収納され、子嚢殻の孔口から子嚢胞子が放出されます。

他方、子実体の根元には、こぶ状の「ソボール」という器官が形成されています。ソボールの内部には楕円状の「厚膜胞子」が形成されます。厚膜胞子とは、栄養菌糸の一部が細胞壁により区画され肥厚する事で厚膜化したもので、楕円形～紡錘形の形状をとります。

●ツクツクボウシタケ (*Isaria sinclairii*)

ツクツクボウシタケはセミの仲間であるツクツクボウシの幼虫に寄生する冬虫夏草の一種で、不完全菌(アナモルフ菌)です。稀にアブラゼミの幼虫にも寄生する事もあります。宿主であるセミの幼虫は菌糸で覆われ、子実体(シンネマ)が分岐する事が多く、先端に粉上の分生子を形成します。

●ボーベリア (*Beauveria*) の仲間に寄生されたハチの一種



ボーベリアは昆虫病原糸状菌の一種で昆虫などの節足動物に寄生して病気を起こしたり、死に至らしめます。特に宿主から水分を奪い宿主の体を硬直させるものを「僵病菌(きょうびょうきん)」と言います。上写真はハチの仲間にボーベリアが感染したもので、森の中に落ちていました。

生物工学の世界ではボーベリアを生物農薬として利用する事が古くから研究され、現在はカミキリムシの防除などに実用化された事例もあります。